

設し、同時に栄養・看護外来を発足した。

発足後1年半がたち、栄養・看護外来が患者にどのように受け止められているか、今後の指標を知るためにアンケートを行った。

その結果から、病気に対する取り組みが変わった患者も多く、HbA1cの平均値が7.41%から6.52%へ改善している。

センター開設当時は、看護師・栄養士がお互いの分野の知識が不足だったが、現在はCDEの勉強会に出席したり、お互いに情報交換をし、知識の取得に努力している。

しかし、患者のもっている問題はなお多種多様であり、そのような場面においても適切な指導が行えるように、私達も技術の向上に今後も努めていきたい。

12 糖尿病患者への心理的援助

—グループワークを試みて—

佐藤 文江 (刈羽郡総合病院
精神科心理室)
内山 洋子 (同 栄養科)
片桐 尚・涌井 一郎 (同 内科)

糖尿病患者への心理的援助として、当院で1年半前から行なっているグループワークについて報告した。

【グループワークの概要】対象は入院中の患者。スタッフは臨床心理士と栄養士。目的は「病気や療養生活をめぐる気持ちを患者同士が互いに話し、気持ちの整理をし、糖尿病へのより良い適応ができるよう援助すること」。患者は互いに話し聴き、スタッフは基本的には傾聴する。

【症例を通して】入院時、反発や不満が強かった1症例の、2回の参加の経過を通して、グループワークの機能や、心理的観点からの患者理解と対応の実際を示した。

【まとめと今後に向けて】血糖コントロールの不良と感情表現の困難さとの関係を指摘する報告があるが、当院のグループワークでもその印象があった。反発の形でも感情表現のできる人は態度やコントロールに改善が見られることがあるが、改善困難例では感情表現が少ないことがあった。

後者への援助の工夫が今後の課題と考える。

13 栄養看護外来での新たな取り組み

—体重記録のグラフ化の試み—

小板 恵子・桜井 優子
内山 洋子・高野 暁子 (刈羽郡総合病院)
小出 ふみ (栄養科)
藤林みどり (同 看護科)
片桐 尚・佐藤 高久
涌井 一郎・小林 敷 (同 内科)

【目的】肥満から糖尿病を合併し、教育入院の困難な患者さんを対象に体重記録を行い、グラフ化することで自発的な行動の変容を患者さんから引き出すことを目的に外来で継続指導する。

【対象症例】男性26名、女性15名、合計41名。平均年齢54歳。

【方法】①24時間の生活状況を聞き取る。②朝(排尿後)夜(就寝前)に体重測定を行う。可能であれば食事記録又は運動記録も行う。③記録をグラフ化して、食生活状況、活動量が体重の増減に影響することを視覚的に認識してもらう。

【結果】体重減量成功例14%、体重減量継続例48%、体重減量中断例38%。

患者さんが、体重・運動の記録をし、栄養士がグラフ化することで問題点が視覚的に認識できる。こちらが問題点を指摘するよりも「気づかせる」というような指導方法が患者さんの主体性を引き出したのではないかと考えられる。

14 『糖尿病ビジネス』の実態と対策

中村 宏志・中村 隆志 (中村医院内科)
中村 隆志 (新潟薬科大学
薬理学教室)

『糖尿病ビジネス』とは、糖尿病に関して現在行われている治療法を否定し、科学的根拠のない治療法を患者にすすめ、利益(金銭、感謝、名誉、視聴率)を得ようとするものである。具体的には、健康食品、健康器具、テレビ番組、出版物、などがある。内容は多岐にわたっており、患者の治療に大きな影響を与える場合も多い。医療関係者はこ